

Jリーグにおけるキャリア選択のパターンとその変容

A Study on Patterns of the carrier choice in J League

出口 恭平・渡 正

1. はじめに

2013年、Jリーグは1993年の開幕から20年を迎えた。開幕当初10チームだったチーム数は、1998年に18クラブとなる。1999年にはJ1とJ2の2リーグ制度が開始され、J1は16クラブ、J2は10クラブになった。その10年後の2009年にはJ1は18クラブ、J2も18クラブとなり、2013年現在では40チームにまで拡大した。

Jリーグが取り組んだ育成システムは、日本サッカーの水準向上を目的に設立され、この20年間で大きな成果をもたらした。Jリーグは加盟クラブを「地域に根ざしたスポーツクラブ」と位置付けているが、地域に根ざしたスポーツクラブということからみると、チーム数の増加に伴って、多くの下部組織が設立され優秀な選手を輩出している。チームのホームタウンの子どもたちにとって、サッカーに限らず身近で質の高い指導を受けられる機会があることは素晴らしいことである。各都道府県に最低でも1つのJクラブが存在する日が近い将来到来するだろう。それはこうした地域に密着したスポーツチームが増えることでもあり、スポーツ文化の豊かさに繋がってくるといえる。多くの若者がスポーツに夢を持ち、そのうち幾人かはプロ選手として活躍できる可能性が広がっている。しかし、一方でそれは同時にプロを目指しても成功しない者や引退選手も増加するということでもある。

梅本らが言うように、「毎年約100名のプロ選手が誕生にする一方で、ほぼ同数の選手が引退に至っている現状がある。Jリーグにおける登録抹消選手の平均年齢は26歳であり、全体の約7割の選手が20代での現役引退を迫られている」(梅本ら 2007: 170)。Jリーグ選手の年齢構成は、10代から25歳まで

が多く、高校サッカーやクラブユースからプロになっても5年後には現役を引退している選手がいる。これが大卒選手であると、3年後には、早い場合だと1年後には引退を迫られていることが分かる。

サッカー選手は選手寿命が短い（平均26歳）。ファーストキャリアがどのように形成されているのかを検討することは、セカンドキャリアを考えることと同様に重要なことである。そこで本研究では、プロサッカー選手がどのようにしてプロサッカー選手になったのか、プロサッカー選手のファーストキャリアを区別して、Jリーガーのファーストキャリアの所属移行を明らかにすることを目的にする。

2. 先行研究の検討と研究方法について

図1は、梅本らがユースチーム終了後の進路選択についてスタッフにインタビューし調査を行ったものである。高校3年生であったユースチーム所属選手の進路を示している。該当する38名のうちJリーグクラブのトップチームに昇格した選手は、26.0%（ $n=10$ ）、大学に進学した選手は71.0%（ $n=27$ ）であった（梅本ら 2007：174）。

梅本らの研究はユースチーム所属選手の進路にのみ焦点を絞っている。しかし日本サッカーでは、プロサッカー選手になれるのはユース選手からだけでなく、高卒、大卒の割合も多い。図1から見られるように、ユース終了後の進路移行で71.0%の選手が大学進学を選択している。多くのユース卒選手の進路移行が大学進学になっているのである。現在のプロサッカー選手がどのように所属移行しているのかはユース年代の進路移行だけでは、把握できない。そのため高卒選手、ユース卒選手、大卒選手がいかにして所属移行してき

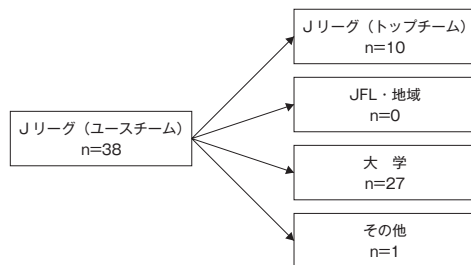


図1 ユースチーム所属選手のユース終了後の進路（梅本ら・2007:174）

たのかを調査する必要があるだろう。

また、ユース選手の多くが大学進学するということは、プロサッカー選手になるということ一度断念するということでもあるだろう。つまりユース所属の選手にとって、大学進学とは一種のセカンドキャリアともいえる。所属移行におけるファーストキャリアの重要性は、セカンドキャリアに繋がってくるのではないかと考えられる。

では、実際にはプロサッカー選手のファーストキャリアの進路移行はどうなっているのだろうか。高卒選手とユース卒選手と大卒選手のプロサッカー選手になるまでの所属移行パターンを示し、また所属移行での学歴も含めて明らかにする。どの所属移行を選択することが、現在のプロサッカー選手を輩出しているのか。

Jリーグの新人選手獲得方法は主に二つある。一つ目は、下部組織からそのままトップチームに昇格する方法である。下部組織からプロサッカー選手になるという形は、ヨーロッパなどのクラブでは一般的である。例えば、スペインリーグの強豪のバルセロナでは、トップチームの選手は下部組織出身選手が多く下部組織での育成に力を入れていることで有名である。

二つ目が、高校・大学の選手と直接プロ契約する方法である。選手自身がクラブを選び、交渉するか、クラブの練習会に参加し、注目された選手が、契約をむすぶことが出来る¹⁾。選手の登録数は、Jリーグで定められており、基本的に登録数(25人)以上の選手を保有することができない。

本研究では、1996年から2012年²⁾までのJリーグ選手名鑑を用いて、サッ

1) Jリーグのプロサッカー選手のすべてが同じ契約で結ばれているのではない。契約に大きく関わってくるのが、選手の試合出場時間である。主に出場した時間により、選手の契約が決まる。Jリーグ選手の契約は3種類ある。プロA契約は一定基準の試合出場時間を達している選手が結ぶもので、最低年俸が480万円と定められている。プロB契約は、A契約と同様の試合時間を達成し、かつプロC契約から3年経過していることが必要である。プロC契約選手は、アマチュア契約選手、社員選手がプロサッカー選手として結ぶ契約である。

2) Jリーグが開幕した1993年から1995年までについては、日本サッカーリーグ時代からの所属選手が多く、プロ契約に至る経路がたどれなかったことから本稿では対象から外した。

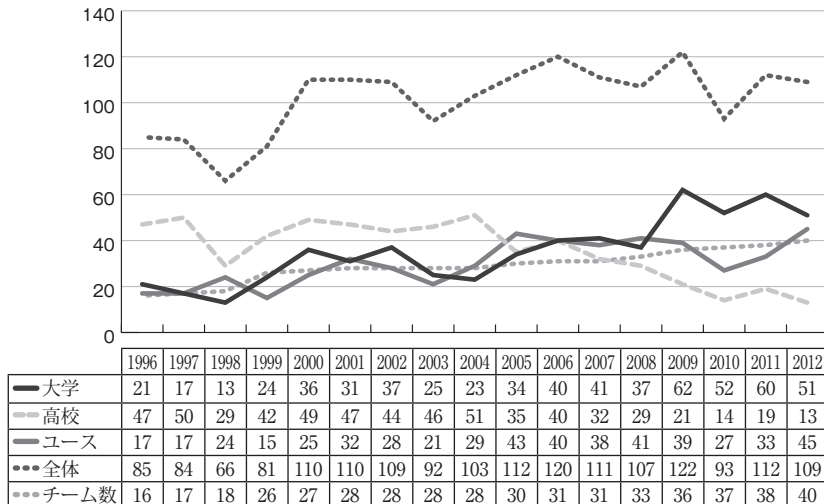
カー選手の進路調査を行った。特に日本人の新人選手がどのような経歴を経てプロ契約にいたったのかに着目した。プロ選手になる経路として以下の4点が考えられる。①高校部活動から直接、②クラブユースからトップ昇格、③高校部活動から大学を経由、④ユースから大学を経由、である。以上の点に着目し、Jリーグ全体、J1・J2ごとに分けてプロ選手となるキャリアのパターンを明らかにした。JリーグにはJ1・J2の入れ替えがあり、調査の間中でも同一クラブが二つのリーグを移動したことがあるが、その場合はJ1所属時にはJ1としてJ2所属時にはJ2としてカウントした。

3. 結果と考察

3-1 Jリーグ全体の新人獲得人数について

表1に示したとおり、1996年から2012年までの16年間に於いて、チーム数の増加率（1996年：16チーム→2012年：40チーム）に比べると微増傾向にあると捉える事ができる。1999年から2000年に新人獲得人数が増加しているがこれは1999年からJ1・J2の2リーグ制に移行しチーム数が26チームに増えたためといえる。

表1 Jリーグ全体の新人獲得人数

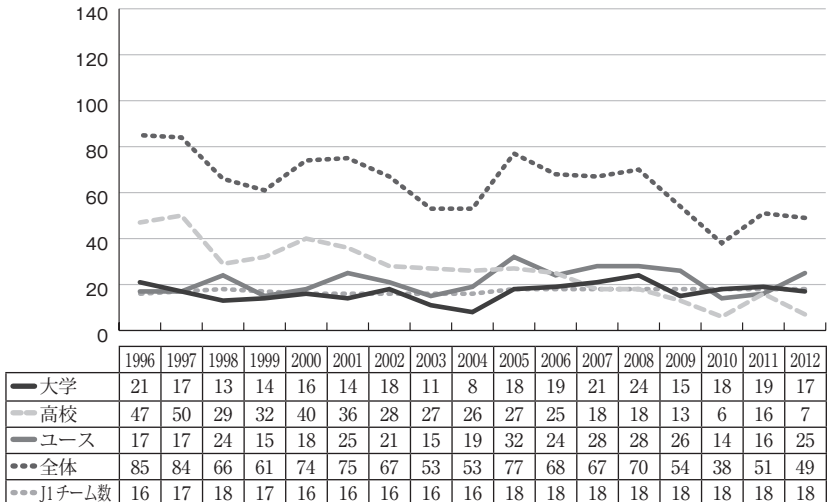


全体として捉えれば、2005年から高校部活動卒の選手獲得数が減少し、代わってユース出身や大学卒の選手が増えたということがわかる。特に大学卒の選手は2009年以降Jリーグ全体で最もプロ選手になっていることがわかるだろう。また、2008年になるとJ1新人選手が44人、J2新人選手が50人になり、J2新人選手数がJ1新人選手数を上回るようになる（J1：18チーム、J2：18チーム）。

3-2 J1の新人獲得人数について

J1だけを見ても、1996年から2012年までの期間で、チーム数に大きな変化は無いにもかかわらず、新人獲得数が減少傾向にあることがわかる。キャリアごとの変化についてみてみると、やはり高校部活動出身選手の減少が目立っている。特に2000年以降、高校部活動出身選手は減少しつづける。2004年までは高校出身が最も多く、ユース出身、大学出身選手の順であったが、2007年以降には高校出身選手が最も少なくなる。ユース出身者の獲得数は、2004年までは一貫して高校卒の選手よりも少なかったが、2005年以降逆転する。以降はユース出身者がJ1チームの新加入選手数で最も多くなる。大

表2 J1の選手獲得状況



卒選手の場合、2007年までは、高校・ユースと比べると総じて獲得数が少ない。しかし2007年以降、高校出身者の獲得数の減少もあり、大学出身選手の獲得数が高校出身選手の獲得数を上回った。ここ数年は高校出身者を上回って安定的に選手を輩出しているといえる。

2005年以降のユースからの昇格者の獲得数が最も多かった要因として、2002年度からJリーグが取り組んだJリーグアカデミーによる子ども育成事業が関係していると考えられる。Jリーグアカデミーによる子どもの育成とは、日本型の育成システムの確立を目指したものである。重点的活動として、一貫指導体制の充実、育成に関する調査・研究など、それぞれの年代に応じた指導を行い、トップアスリートの育成に取り組むものだった³⁾。その成果としてジュビロ磐田、サンフレッチェ広島らのユース選手が昇格を果たしているのではないかと考えられる（磐田がユースから6選手、広島が5選手を昇格させた）。Jリーグの育成システムの成熟に伴い、ユース出身者の水準が向上し、優秀なユース選手が育成されたことが、J1に占めるユース出身者の増加につながっているのではないだろうか。反対に、クラブの育成システムの発展が、高校部活動卒の選手獲得数の減少につながっているともいえる。つまり、ジュニアユース・ユース年代で有望と考えられた選手は、高校部活動に所属するのではなく、クラブのユースチームに所属することが多くなったといえるだろう。

3-3 J2の新人獲得人数について

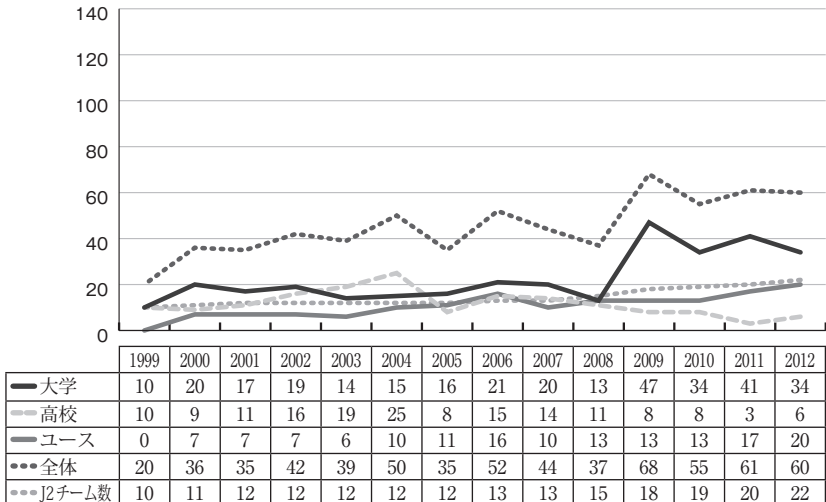
J2では、J1とは逆に一貫して新人獲得数の増加が見られる（表3）。高校部活動出身選手は、1999年から2004年まで徐々に獲得数が増加していくものの2005年に大幅な減少を示し、その後一貫して減少傾向が続く。一方、ユース

3) 当時、Jリーグアカデミー事業として7クラブが「育成センター」を設置した。鹿島アントラーズ、FC東京、横浜Fマリノス、ジュビロ磐田、名古屋グランパス、ガンバ大阪、サンフレッチェ広島である。育成センターには、Jリーグアカデミー本部のアドバイザースタッフから、各専門分野のアドバイザーが派遣され、子ども達の育成強化、調査のためのサポートが充実していた。また育成センターには育成活動費が支給されることになり、経済面でのサポートも行われた。

ス出身者の選手獲得数については2000年以降、微増の傾向を示している。2005年と2006年には高校出身選手の獲得数よりも上回り、近年ではJ2の場合も、高校出身よりもユース出身の選手が増えている。

ユース出身者の増加の理由は次のようなものと考えられる。J2のチームの多くは、ユース年代の育成が立ち遅れていた。そこで、J1クラブのユース選手をJ2のクラブが獲得していたのである。J1の下部組織で育ちながらも自らのチームでトップチームに果たす事ができない選手をJ2のクラブ側が獲得し、プロサッカー選手として契約していたのである。2008年のユース出身選手のうち7人が、J1クラブでトップ昇格出来なかった選手であり、2009年も同様にJ1クラブのユース出身者を6人獲得している。また2010年以降、J2でもユースでの育成に力を入れて選手を昇格させているチームも増えてきている。2011年にガイナレ鳥取はユース選手をトップ昇格させており、2012年にはザスパ草津（現、ザスパクサツ群馬）がクラブ初のユース出身のプロサッカー選手を生み、ロアッソ熊本もアカデミーセンター初のトップ昇格を果たしている選手がいる。J2のクラブもユースの育成の成果が現れていること、J1クラブのユース選手を獲得したことの2点がユース出身選手の増加に

表3 J2の新加入選手の獲得別人数



繋がったと考えられる。

一方、大卒選手の獲得数はJ2が始まって以来高い数値を示している。特に2009年以降は、大学出身選手が大幅に獲得されており、J2新人加入選手の多くを大学出身選手が占めている結果になっている。J1の場合大学出身選手の獲得数は増加していると判断することはできないため、この点が、J1とJ2の違いを明確に示している。Jリーグ全体での大学出身選手の増加は、J2によるものと考えられる。

2009年に大学卒の新人獲得選手は47人と大幅に増加している。この年は、J2のチーム数が3チーム増え18チームとなったためであることと、2009年に新加入したファジアーノ岡山が11人、前年に加入したFC岐阜が8人と大幅に選手獲得しているための増加である。

こうしたことから、大学出身の選手は、J2クラブのニーズにマッチしていると言える。なぜなら、大卒選手は育成の時間と手間がかからずにチームの戦力となるためである。経営面から考えると若手選手の育成には非常にお金がかかる。しかし、大学卒業選手であればある程度完成した選手を獲得することになるため、育成費がかからない。

特に、育成費の関係で考えるとそれはトレーニングコンペンセーション(TC)の問題が関わっている。FIFAが定める「Regulations on the Status and Transfer of Players (選手の地位ならびに移籍に関する規則。通称RSTP)」では23歳以下の選手がクラブを移籍する際には、その選手が12歳から21歳まで育成したクラブに、移籍先クラブが育成補償金たるTCを支払うことを義務付けている。日本にもトレーニングコンペンセーションが適用されている。日本には独自の制度になっており、2種類に分かれている。トレーニング費用とトレーニングコンペンセーションである。トレーニングコンペンセーションは、プロサッカー選手がプロサッカー選手として移籍する場合の育成補助金である。

トレーニング費用というのは、ある選手がプロサッカー選手になった場合、その選手を育てた高校、大学(15歳から22歳)に対して支払われる育成

補助金である。プロ契約直前に在籍したクラブに対し、上限30万円×在籍年数が、さらにその前の在籍したクラブに上限15万円×在籍年数が支払われる。例えば、高校部活動から大学に進学しプロサッカー選手になった場合は、大学には30万円×4年=120万円が、高校には、15万円×3年=45万円が上限として支払われる。これはあくまでも上限であり、また財政状態や経困難を理由に支払わないクラブもあるという。この規則を守っているJクラブは全チーム中3分の1程度と言われている。大学出身のJリーガーが増えているにも関わらずにトレーニング費用が支払われていないのは問題であるが、それでもクラブ側は、優秀な選手を最大でも165万円支払う事で獲得することが出来る。

さらに、サテライトリーグが廃止されたことも、大学に進学してからプロ契約をする選手が増えた要因と考えられる。サテライトリーグは、出場機会の少ない選手が（特に若手）出場する、いわば育成リーグであった。各クラブの資金繰りや経費削減、日程調整の難しさ、真剣勝負の場として機能しきれなかったことなどが廃止された理由とされる。つまりサッカー選手の成長できる場として、Jリーグで控え選手であることよりも大学でのレギュラー選手のほうが適切であるという考え方に変わってきているといえよう⁴⁾。実際、J2の大学卒新人選手の出場試合数（表4）をみると戦力として一定の評価を得ていることがわかる。

表4 J2大卒選手の試合出場数

大学J2	40試合以上	30試合以上	20試合以上	10試合以上	5試合以上
2011年	0	9	4	4	4
2010年	0	2	5	8	6
2009年	9	3	4	6	2

3-4 大学卒選手の増加と高校部活動出身者の減少

大学卒選手の新人獲得数の増加についてももう少し見てみよう。特に2009年

4) しかし、2012年の日本サッカー技術委員会では若手の育成の問題が出ており、サテライトリーグの再開の声もささやかれているという。

以降、J2での大学卒選手の獲得数の増加が目立っている。J2では2009年に47人の大卒選手が獲得されたが、そのうち37人の選手が高校部活動からの大学に進学した選手であった。前項でも簡単に触れたがここでもう一度その要因について考えてみる。

大きな要因はこの時期に、大学サッカーの見直しが進んだことがあげられる。「Jリーグブームが終焉すると、観客動員数が減少し、テレビの放映権料が激減したことにより、クラブ経営体力が削がれ、リストラの波が選手達を襲った。サテライトリーグの試合数が減少し、若手選手の出場機会は減っていった」（橋木・斉藤2012：29）状況のなか、前述したとおり2009年でサテライトリーグが廃止され、若手育成の機会が失われていた。そこであらためて、18～22歳の育成機関として大学サッカーが見直されるようになったといえる。

Jクラブによる育成機会の喪失は高校出身者の減少、大学出身者の増加の傾向をさらに強めている。松原はこの点について次のように述べている。

高校の部活動、Jユース出身者は、18歳でプロ選手となるが、その時点では、肉体的強さの面で即戦力とはいえず、トッププロの中で、最終的なトレーニングを経なければならない。ユース年代の選手は、最低2～3年間は、契約チームで育成する状況であるので、そこで戦力と判断されなければ解雇される（松原2012：62）

たとえば、近年のJリーグにおける高校部活動出身選手の出場試合数は表5のようになっている。つまり、高校部活動出身者はルーキーイヤーで試合に出場するチャンスがない。それが肉体的な能力の低さによるものかは判断ができないが、出場試合数の減少とそれに代わる育成機会の減少が、大学を経由する選手の増加につながっていると考えられるだろう。現状として高校部活動から直接プロ契約にいたる選手が減少してきているのは事実であり、プロサッカー選手になれるにも関わらずに大学進学を優先する選手もいる。た

表5 高校部活動出身選手の出場試合数

高校J1	40試合以上	30試合以上	20試合以上	10試合以上	5試合以上
2011年	0	0	0	1	3
2010年	0	0	0	0	1
2009年	0	0	2	1	0
高校J2	40試合以上	30試合以上	20試合以上	10試合以上	5試合以上
2011年	0	0	0	1	0
2010年	0	0	0	1	0
2009年	0	0	0	0	2

たとえば、佐賀東高校から筑波大学に進学した赤崎秀平選手などがいる。

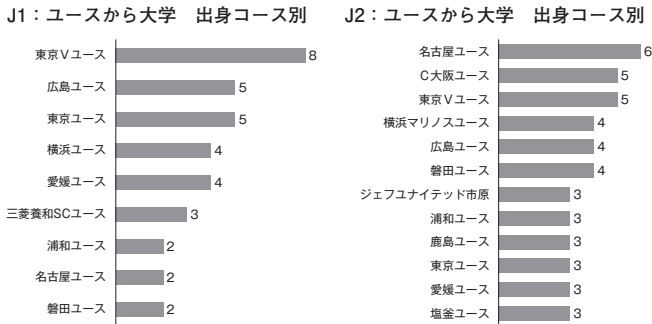
この流れを生み出したのは、もちろんJチームでの育成機会の減少や選手のセカンドキャリアへの意識もあるが、特別指定選手という制度が大きいと考えられるだろう。特別指定選手制度は、全日本大学サッカー連盟、全日本高等体育連盟サッカー部、またはJクラブ以外の第2種日本クラブユースサッカー連盟加盟チーム所属選手を対象に、日本サッカー協会の認定を受けた高校生や大学生が、所属チームに登録したまま、Jリーグなどプロの試合でプレーをすることが出来る制度である。1998年に強化指定選手という名称で始まり、当初の対象は高校生のみを対象であったが、2003年に特別強化選手という名称に変わるとともに対象が大学生にも広げられ、大学生にも特別強化選手のチャンスが生まれた。1クラブに3人まで同時に受け入れが可能になり、高校生や大学生はこの制度により、大きくチャンスを得ている。日本サッカー協会はサッカー選手として最も成長する年代に、「個人の能力に応じた環境」を提供することと規定している。

この特別指定選手制度の発足により、選手たちは、大学に進学し大学部活動での活動を行いながらJリーグなどの試合に出場することが可能になった。つまり、日常的な育成は大学が担うとともに、高いレベルでプレーする機会も与えられる。育成機会を創出できないJ2のクラブにとって、特別指定選手あるいは大学生は、ニーズにマッチしているといえる。例えば、特別指定選手の受入先クラブは、2011年、2012年ともJ2クラブが多いという結果になっている。つまり結果としてこの特別指定選手制度は、「個人の能力に応じ

た環境」を提供するという当初の目指された機能の他に、育成力の乏しいJ2クラブが優秀な選手を確保しつつ、その育成を大学に任せることが可能なものにもなっているといえよう。

一方、ユース出身者が大学へ進学するケースも近年増えている。たとえばJ1では、2011年に横浜Fマリノスが、横浜ユースから大学を経た選手を獲得している。ユースからトップ昇格を果たせなかった選手が、大学を経由して自らが育ったチームにプロサッカー選手として戻るという状況が生まれている。

表6 大卒新人選手の出身コース（左：J1 右：J2）



J1のチームが獲得したユース出身で大学に進学した選手では、東京ヴェルディユース出身選手が最も多く、ついで広島ユース出身選手、横浜マリノスユースと続く。J2では、名古屋ユースをはじめとしてC大阪、磐田や広島、横浜Fマリノスなど現在J1にいるチームのユース選手が大学に行ってから、J2の選手になっていることが分かる。つまり、これらのチームのユースは自らのトップチームに昇格させるよりも、ユース後に大学に進学させており、こうしたJ1のユースチームが増加しているといえるだろう。

J2チームが獲得したユース選手に関しては、名古屋ユースの選手が6選手と最も多い数字であった。名古屋グランパスのようなチームは、トップクラスの選手を移籍で獲得しているために、優秀な選手が育つ環境があるのにも関わらずに、大学を経てプロサッカー選手になっていると考えられる。たと

えば、2009年には田中隼磨、2010年には田中マルクス闘莉王、金崎夢生、2011年には藤本淳吾といった選手を補強で獲得しているため、ユース出身者を昇格させる隙がない。そのため、名古屋ユース選手の多くは大学進学を選んでいられる。2010年の名古屋グランパスユースでは、ユースからのトップ昇格選手は存在せず、多くが大学進学をしているのである。こうしたことが、J1チームの優秀なユース選手が大学進学後にプロサッカー選手になっている状況を生んでいる。

以上のように、多くの選手が大学進学後にプロ契約に至っている状況は、日本サッカー特有である。それには日本の大学サッカーの競技力が高いことも関連しているだろう。日本のユニバーシアード大会での優勝回数5回は各国のなかで最多であり、2001年・2003年・2005年とユニバーシアード大会を3連覇している。ユース年代のサッカー選手にとってこうした大学サッカー部の競技力の高さは、自らを成長させる可能性を持つ場所と捉えられているともいえるだろう。

大学に進学することは、サッカーでの成長だけでなく、学業にも励まなければならないということである。言い換えれば、引退後のセカンドキャリアの観点からも、日本社会では大学出身者のほうが有利と考えることもできるだろう。その結果、高校部活動出身選手やユース卒選手のうち、即プロで通用するかが判断できない選手は、大学へ進学する選択をしているのではないだろうか。また、Jリーグクラブ、特にJ2のクラブにとっても大学サッカー部所属の選手を獲得することに多くのメリットがあるといえるだろう。

3-5 ユース出身者の増加について

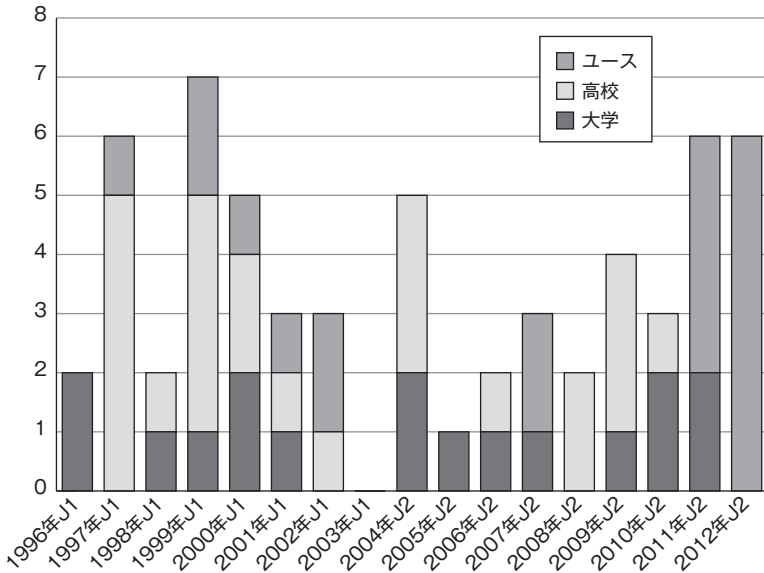
大学進学者ほどではないが、ユース卒新加入選手もこの20年間で増加傾向にある（表1）。この1996年から2012年の期間でもっともJリーガーを輩出してきたクラブは、横浜Fマリノスユースであり、ガンバ大阪ユース、柏レイソルユースが続いている。Jリーガーへのキャリアパスとしてユースチーム出身者が増加傾向にあることは、これまでのクラブの取り組みの成果である

といえる。

横浜Fマリノスは前身である日産自動車時代から育成組織の充実に注力してきた。横浜Fマリノスの下部組織として、みなとみらい校、追浜校、NAS二俣川校、大和校、東山田校の5つがあり、それぞれでスクールが実施されている。ガンバ大阪の下部組織は、幼稚園の年長と小学生1年生から6年生のジュニア、中学生のジュニアユース、そして高校ユースで構成されている。ジュニアとジュニアユースには万博、堺、門真の3チームが設立されている。ジュニア年代は約900人、ジュニアユース年代で約250人、ユース年代で35人が在籍しており、それぞれのカテゴリーの育成方針が明確にされた育成システムが構築されているために、ユース年代から多くのプロサッカー選手が輩出されているといえる。

J2クラブが獲得するユース卒新加入選手では、東京ヴェルディユース、京都サンガユース、コンサドーレ札幌ユースが特に多い。この中でも京都サンガの取り組みが注目に値する。京都は、2006年に「スカラアスリートプロジェクト」を発足させた。これは、京都サンガFCと立命館大学、京セラが一体となってプロサッカー選手を育成しようというプロジェクトである。クラブユースの選手は寮生活を行いながら立命館宇治高等学校へ通い、サッカーを行う。立命館宇治高校への入学金・学費は立命館大学が奨学金として負担している。選手にとっては、経済的負担が少ないことだけでなく、学校と練習場と寮が近場にあり、練習後30分以内に食事がとれるなど成長期である高校生にとって恵まれた環境が創出されている。この結果、2006年から数えると11人ものプロサッカー選手を輩出している。京都サンガのトップチームは、2012年ではユース選手のみを獲得している（表7）。このような取り組みはサンフレッチェ広島や浦和レッズなど多くのクラブで開始されており、今後ユース出身のJリーガーはますます増加していくものと考えられる。

表7 京都サンガの出身別新人獲得者数



4. 結論

Jリーグの新加入選手について、大学出身選手（高校部活動から大学進学、ユースから大学進学）、高校部活動出身選手、ユース出身選手の進路移行を調査した結果以下のことが明らかとなった。

- ・J1とJ2ともに大卒選手はこれまで増加傾向にあり、特に大卒選手はJ2に関して、2009年から大幅な獲得が見られた。
- ・大学に進学したユース出身選手が所属したユースでも最も大学進学者を輩出しているのが東京ヴェルディであり、J2チームで獲得された大学進学者のうち名古屋グランパスユース出身の選手が最も多かった。
- ・高卒新加入選手は年々減少していき、現在では最も少ない獲得数であった。
- ・ユース卒新加入選手の出身ユースは、横浜Fマリノスユースが最も多い。J2に関して最も多かったのが、東京ヴェルディと京都サンガFCである。京都サンガFCは、「スカラープロジェクト」の成功が考えられる。

1996年当時の新加入選手の移行パターンは、高校部活動から直接プロサッカー選手となるのが全体の半数を占めていた。それが徐々にその経路が減少していく。代わりに増加したのが、クラブのユースからプロサッカー選手になるという経路である。ユースに将来有望な選手が流れることで、高校から直接プロサッカー選手になれるかわからない選手が大学進学を選択するようになった。それが明確になったのが2005年であり、高校から大学進学選手という移行パターンが確立した。結果、ますます高校から直接プロサッカー選手になれる選手が減少したといえる。現在では、クラブユース出身選手と大卒選手、特に高校から大学進学を経る選手が多くプロサッカー選手になっている。J1とJ2で分ければ、J1の場合は、ユース卒選手が最も多く、J2の場合は大卒選手が新加入選手で多い結果になっている。よって現在の新加入選手の移行パターンは、J1はユース出身選手、J2では大卒選手（高校部活動出身）が最も多い結果になっている。そのため現在では、大学サッカーがプロサッカーのセカンドチームとして育成の役割を担っているといっても過言ではない。

現在のJリーグには、優秀な選手でさえも、大学でサッカーをすることをを選択する。松原と高橋が言うように、「特に23歳前後で出場機会を得なければ、失業も視野にいれなくてはならない」（松原・高橋 2012: 162）。23歳前後が、一つのメルクマールなのであれば、ユース年代からの選手は約4年間、大卒選手では1年間しかチャンスが無いということになる。10代でプロサッカー選手になり、Jリーグに入るものの試合出場機会が少なく、育成機会も減少している現在、選手が成長出来る場所がないということは大きな問題であろう。

一方、J2において急激に増加した大学出身選手という以降パターンにも問題点が潜んでいる。すなわち、大学サッカー部および大学出身選手は、Jクラブにとって、非常に使いやすい選手と捉えられていることである。育成費がきちんと支払われていないという問題もあるが、より重要なのはセカンドキャリアの問題点である。大学出身選手は、高校部活動から直接プロになっ

2013年6月 出口恭平・渡正：Jにリーグおけるキャリア選択のパターンとその変容

た選手や、クラブユース出身選手よりも一般的に学歴が高い。大学と提携しe-スクールなどを用いて大学卒程度の学歴を選手に保障するJクラブもあるがまだまだ少ない。そのため、大学卒の選手は、引退後のセカンドキャリア選択に幅ができると考えられる。結果としてクラブはリーグで結果を残すことができなかつた大卒選手を、見切りをつけやすく入れ替えが容易な選手という位置付けをしているともいえる。特に大学出身選手が入団するクラブはJ2という、一般的にクラブの財政状況や戦績の安定しないチームである。それらのクラブに若手選手の育成やセカンドキャリアについてしっかりとしたサポートを期待することは現状では難しいと言わざるを得ない。

そのため、大学に進学した選手は、サッカーでの成長だけでなく、すぐに訪れてしまう可能性の高いセカンドキャリアに備えて4年間を過ごす必要がある。例えば、大学に行かなければ取得できない資格や免許の獲得といったことに意識する必要があるだろう。そうして高卒選手とユース卒選手よりも優位な面を大学で築き上げる必要がある。

現在Jリーグには、育成年代の選手が試合に出場できる成長する場所がないために、大学でのサッカーを選ばざるをえない状況になっている。特にサッカー専門でやってきたユース選手の今後は考えていなくてはならないだろう。Jリーグのチーム数増加と20年間という歴史は、サッカーを行う若者たちに希望をもたらしてきた。またJリーグ側も現在のJ1とJ2の下にJ3リーグ作ることを検討している。そうなれば、さらにサッカー選手が増加するだろう。だがそれが、若者の「やりがいの搾取」にならないためにも、今後のJリーグのあり方や、クラブでの若手育成、セカンドキャリアの問題を見守っていかなければならない。

参考文献

松原悟、2011「選手構成からみた高校・大学サッカーの現状」東北学院大学教養学部論集第160号：29-35。

———、2012「J1リーグチーム組織に関する考察」東北学院大学教養学部論集第161

号：55-66.

松原悟・高橋信二、2012「Jリーグ移籍に関する考察」東北学院大学教養学部論集第162号：17-30.

橘木俊詔・斉藤隆志、2012『スポーツの世界は学歴社会』PHP新書.

高橋潔、2010『Jリーグの行動科学——リーダーシップとキャリアのための教訓』白桃書房.

高橋潔・重野弘三郎、2010「Jリーグにおけるキャリアの転機——キャリアサポートの理論と実際」日本労働研究雑誌603：16-26.

梅本祥子・松岡宏高・藤本淳也、2007「ユースチーム所属選手の所属団体以降パターンとキャリア意識に関する研究——Jリーグクラブユースチームに関する選手に注目して」大阪体育大学紀要39：169-175.

山本教人・多田納秀雄・吉田毅・三本松正敏・松尾哲矢、1999「高校一流サッカー選手のキャリア形成過程とキャリア志向」健康科学21：29-39.

吉田章・佐伯年誌雄・河野一郎・田嶋幸三・菊幸一・大橋仁、2006「トップアスリートセカンドキャリア構築に関する検討（第一報）」筑波大学体育科学系紀要29：87-95.

上向貫志、飯田義明、玉井朗、東海林毅、2009「Jリーグユース選手におけるキャリア形成過程とプロ志向に関する研究」武蔵大学人文学会雑誌 第39巻第2号：207-220.